江戸川乱歩

指環

登場人物

A

B

乱歩版

一場

◆列車内。二人が再会する。
◆A、B

A　失礼ですが、いつかも汽車で御一緒になった様ですね。

B　これは御見それ申しました。そういえば、私も思い出しましたよ。やっぱりこの線でしたね。

A　あの時は飛んだ御災難でした。

B　いや、お言葉で痛み入ります。私もあの時はどうしようかと思いましたよ。

A　あなたが、私の隣の席へいらしったのは、あれはK駅を過ぎて間もなくでしたね。あなたは、一袋の蜜柑を、スーツケースと一緒に下げて来られましたね。そしてその蜜柑を私にも勧めて下さいましたっけね。……実を申しますとね。私は、あなたを変に慣れ慣れしい方だと思わないではいられませんでしたよ。

B　そうでしょう、私はあの日はほんとうにどうかしていましたよ。

A　そうこうしている内に、隣の一等車の方から、興奮した人達がドヤドヤと這入って来ましたね。そして、その内の一人の貴婦人が一緒にやって来た車掌にあなたの方を指して何か囁きましたね。

B　あなたはよく覚えていらっしゃる、車掌に「一寸君、失敬ですが」と云われた時には変な気がしましたよ。よく聞いて見ると、私はその貴婦人のダイヤの指環を掏ったてんですから、驚きましたね。

A　でも、あなたの態度は中々お立派でしたよ。「馬鹿な事を

云ってはいけない。そりゃ人違いだろう。何なら私の身体を検べて見るがいい」なんて、一寸あれ丈けの落着いた台詞は云えないもんですよ。

B　おだてるもんじゃありません。

A　車掌なんてものは、ああした事に慣れていると見えて、中々抜目なく検査しましたっけね。貴婦人の旦那という男も、うるさくあなたの身体をおもちゃにしたじゃありませんか。でも、あんなに厳重に検べても、とうとう品物は出ませんでしたね、みんなのあやまり様たらありませんでした。ほんとに痛快でした。

B　疑いがはれても、乗客が皆、妙な目附で私の方を見るのには閉口しました。

A　併し、不思議ですね。とうとうあの指環は出て来なかったというじゃありませんか。どうも、不思議ですね。

B　……

A　……

二場

◆列車での出来事を赤裸々に語りだす二人。
◆A、B

B　ハハハハハ。オイ、いい加減にしらばくれっこは止そうじゃねえか。この通り誰も聞いているものはいやしねえ。いつまでも、左様然らばでもあるまいじゃないか。

A　フン、ではやっぱりそうだったのかね。

B　お前も中々隅へは置けないよ。あの時、俺がソッと窓から投げ出した蜜柑のことを一言も云わないで、見当をつけて置いて、後から拾いに出掛けるなんざあ、どうして、玄人だよ。

A　成程、俺は随分すばしっこく立廻った積りだ。それが、ちゃんとおめえに先手を打たれているんだから叶わねえ。俺が拾ったのはただの腐れ蜜柑が五つよ。

B　俺が窓から投げたのも五つだったぜ。

A　馬鹿云いねえ。あの五つは皆無傷だった。指環を抜き取った跡なんかありゃしなかったぜ。曰くつきの奴あ、ちゃんとおめえが先廻りして拾っちまったんだろう。

B　ハハハハハ。豈に計らんや、そうじゃねえんだからお笑い草だ。

A　オヤ、これはおかしい。じゃ、何の為にあの蜜柑を窓から抛り出したんだね。

B　まあ考えても見ねえ。折角命懸けで頂戴した品物をよ。仮令蜜柑の中へ押込んだとしてもよ。誰に拾われるか分りもしねえ線路の側なぞへ抛られるものかね。おめえがノコノコ拾いに行くまで元の所に落ちていたなぞは、飛んだ不思議と云うもんだ。

A　それじゃやっぱり蜜柑を抛った訳が分らないじゃないか。

B　まあ聞きねえ、こういう訳だ。あの時は少々どじを踏んでね、亭主野郎に勘ぐられてしまったものだから、こいつは危いと大慌てに慌てて逃げ出したんだ。どうする暇もありゃしねえ。だが、おめえの隣の席迄来て様子を見ると、急に追っかけてる様でもねえ。さては車掌に知らせているんだな、こいつは愈々油断がならねえと気が気じゃないんだが、さて一件の物をどう始末したらいいのか、咄嗟の場合で日頃自慢の智慧も出ねえ。

A　恥しい話だが、ただもうイライラしちまってね。

B　なる程。

A　すると、フッとうまい事を考えついたんだ。というのが、例の蜜柑の一件さ。よもやおめえが、あれを見て黙っていようたあ思わなかったんだ。きっと手柄顔に吹聴するに違いない。そうして俺が蜜柑の袋を投げたと分りゃ、皆の頭がそっちへ向かうというもんじゃねえか。蜜柑の中へ品物をしのばせて置いて後から拾いに行くなんざあ古い手だからね。誰だって感づかあね。そうなるてえと、仮令検べるにしてからが、この男はもう品物を持っちゃいねえと云う頭で検べるんだから、自然おろそかにもなろうてもんだ。ね、分ったかね。

B　成程、考えやがったな。こいつあ一杯喰わされたね。

A　ところが、おめえが知って居ながらなんとも云い出さねえ。今に云うか今に云うかと待ち構えていても、ウンともスンとも口を利かねえ。とうとう身体検査の段取りになっても、まだ黙っていやあがる。俺あ「さては」と思ったね「こいつは飛んだ

食わせものだぞ。このままソッとして置いて、後から拾いに行こうと思っていやがる」あの場合だが、俺あおかしくなったね。

A　フフン、ざまあねえ……だが待ちねえ。するってえと、おめえはあれを一体どこへ隠したんだね。車掌の奴 随分際どい所まで検べやあがった。口の中から耳の穴まで隈なく検べたが、でも、とうとう見つからなかったじゃないか。

B　お前も随分お目出度え野郎だな。

A　はてね。こいつは面妖だね。こうなるてえと、俺あどうも聞かずにゃ置かれねえ。そう勿体ぶらねえで、後学の為に御伝授に預かり度いもんだね。

B　ハハハ……まあいいよ。

A　よかあねえ、そう焦らすもんじゃねえやな。俺にゃどうも本当とは受取れねえからな。

B　嘘だと思われちゃ癪だから、じゃ話すがね。怒っちゃいけないよ。実はね、おめえが腰に下げていた煙草入れの底へソッとしのばせて置いたのさ。それにしても、あの時 お前の身体はまるで隙だらけだったぜ。ハハハハハハ、エ、いつその指環を取戻したって、いうまでもねえ、おめえが、早く蜜柑を拾いに行こうと、大慌てで開札口を出る時によ。

〈完〉

のの版

一場

◆列車内。二人が再会する。
◆A、B

A　あの……失礼ですが。

B　はい……？

A　いつぞやも、汽車で御一緒になった様ですね。

B　……ああ、これはおみそれ申しました。そういえば　私も思い出しましたよ。以前も、この路線でしたね。

A　たしかあなたが、私の隣の席へいらしったのは……あれはK駅を過ぎて間もなくでしたね。

B　そうでしたか……。

A　あなたはスーツケースと一緒に、一袋の蜜柑を　下げておられました。

B　ああ、そうでした。

A　そしてその蜜柑を、座るなり私にも勧めて下さいましたっけね。

B　ええ、確か……。

A　……実を申しますとね、あの時、私はあなたを、変に慣れ慣れしい方だと思わずにいられませんでしたよ。

B　ええ……そうでしょう。日頃、私は滅多にそんなことをしませんから。

A　オヤ、そうなのですか。

B　あの日というのは何もかも、ほんとうにどうかしていましたよ。

A　成る程……確かに。

B　……ええ。

A　あの日は、飛んだ御災難でしたね。

B　いや、お言葉痛み入ります。私も、あの時は、どうしようかと思いましたよ。

A　本当に、おかしな日でしたね……。そう、あなたが私に蜜柑を勧めていると、突然、隣の一等車から、興奮した人達がドヤドヤと這入って来て。

B　ええ……。

A　そしてその内の一人の貴婦人が、来るなりあなたの方を指さして、一緒にやって来た車掌に何か囁きましたね。

B　あなたはよく覚えていらっしゃる。車掌から「ちょっと君、失敬ですが」と云われた時には、変な気がしましたよ。聞いて見れば、私がそのご婦人のダイヤの指環を掏ったってんですから……あれは驚きましたね。

A　でも、あの時のあなたの態度は中々お立派でしたよ。覚えていますか？

B　イヤ……どうでしたか。

A　あなたは車掌にこう言い返したんだ。「馬鹿な事を云ってはいけない、それは人違いだろう。何なら私の身体を検べて見るがいい」なんて。

A　よしてください。

B　一寸あれ丈けの落着いた台詞は云えないもんですよ。

B　おだてるもんじゃありません。

A　車掌てものはあああした事に慣れていると見えて、ずいぶん抜目なく検査しましたっけね。それに貴婦人の旦那まで、

うるさくあなたの身体をおもちゃにしていたじゃありませんか。
でも、あれだけうるさく検べても、とうとうあなたから品物は出ませんでしたね。

B　ええ、勿論……。

A　いや、みんなの謝りようったら……ほんとに痛快でした。

B　しかし疑いがはれてもなお、乗客みんなが妙な目附で私を見るのには閉口しましたよ。

A　本当に。飛んだ厄介に巻き込まれましたね。……しかし、どうです。あの事件、不思議だとは思いませんか？

B　ハテ、何でしょう。

A　あの後も、とうとう指環は見つからなかったというじゃありませんか。

B　そうでしたか……。

A　たかだかこんな汽車の中のことです。見つからないというのはどうも……。

B　ウム……。

A　どうも、不思議ですね。

B　……

A　……

二場

◆列車での出来事を赤裸々に語りだす二人。

◆A、B

B　ハハハハハ。オイ、いい加減にしらばくれっこは止そうじゃねえか。この通り、ほかに乗ってる客もいやしねえ。いつまでも、左様然らばでもあるまいじゃないか。

A　フン、ではやっぱりそうだったのかね。

B　お前も中々、隅へは置けないよ。やつらがドヤドヤ一等車からやって来た時、俺はコッソリ、窓から蜜柑を投げ出した。それをおめえは、しかと見てたんだろう。

A　そうだ。俺はすぐに、お前が指輪を、あの蜜柑の中に隠したのだとわかったね。

B　お前はそれを車掌には一言も云わないでおいて、俺が投げた場所の見当をつけ、次の駅で降りて拾いに出掛けたんだ。へへ、なかなかどうして玄人のやり方だよ。

A　その通りさ。あんとき俺は、随分すばしっこく立廻った……積りだったんだ。

B　イヤ、見事だよ。

A　ヘン、それが、ちゃんとおめえに先手を打たれているんだからかなわねえ。急いで汽車を降りて戻ってみたが、どうだ、俺が線路ぎわで拾ったのにゃどこにも指輪は入っちゃいなかった。ただの腐れ蜜柑が五つよ。

B　……俺が窓から投げたのも、五つだったがな。

A　馬鹿云いねえ。あの蜜柑にゃ、指環を抜き取った跡なんか

ありゃしなかったぜ。曰くつきの奴あ、ちゃんとおめえが先廻りして拾っちまったんだろう。

B　ハハハハハ。あにはからんや、そうじゃねえんだからお笑い草だ。

A　オヤ、それはおかしい。

B　俺は拾いには行ってないぜ。それどころか、改札出るおめえを見送ってたぐれえだ。

A　……オイ、今さら嘘吐いたって何もなりゃしないぜ。

B　まあ落ちついて考えても見ねえ。折角命懸けで頂戴した品物だ。たとい蜜柑の中へ押込んだとしてもよ、誰に拾われるか分りもしねえ線路のわきなぞへ、抛られるものかね。おめえがノコノコ拾いに行くまで落ちていたなぞは、かえって不思議と云うもんだ。

A　オイ待てよ。それじゃおめえは、わざわざただの蜜柑を窓から抛ったってことか。訳が分らねえじゃないか。

B　まあ聞きねえ、こういう訳だ。……あの時は、貴婦人から指輪を盗んだまではいいが　少々どじ踏んでね、亭主野郎に勘ぐられてしまったものだから、大慌てに慌ててこっちの車両に逃げ出してきたんだ。恥しい話だが、ただもうイライラしちまってね。座るなりお前に蜜柑を勧めたりしたのも、そんな頭でさ。

A　フン、なる程。慌ててるにしちゃあ慣れなれしい顔付きしたもんだ。

B　しかしな、向こうの様子を見ると、奴ら今すぐに追っかけて来る様でもねえ。さては車掌に知らせているんだ、こいつはいよいよ油断がならねえと気が気じゃねえんだが、さて一件の物の始末はどうしたらいいのか、咄嗟の場合で日頃自慢の智慧も

出ねえと……。

A　へへ、そうかい。

B　だが、そこでフッとうまい事を考えついたんだ。

A　んん？

B　というのが、例の蜜柑の一件さ……。車掌たちの来しなに、俺はお前の目の前で窓から蜜柑を投げた。蜜柑の中へ品物をしのばせて後から拾いに行くなんざあ、古い手だからね。目に入りゃあ誰だって感づかあね。

A　……チッ。

B　おめえはきっと手柄顔で吹聴するに違いねえ。そうして、車掌も客も、俺が蜜柑の袋を投げたと分りゃ、頭がそっちへ向かう。そうなるてえと、仮令検べるにしてからが、こいつはもう品物を持っちゃいねえと云う頭で検べるんだから、自然おろそかにもなろうてもんだ。……どうだい、咄嗟の思いつきにしちゃあ、いい手じゃねえか。

A　成程、考えやがったな。こいつあ俺も一杯喰わされたわけだ。

B　ところが……ここで番狂わせだ。なあ？　おめえが蜜柑のことを知って居ながらなんとも云い出さねえときた。今に云うか今に云うかと待ち構えていても、ウンともスンとも口を利かねえ。とうとう身体検査の段取りになっても、まだ黙っていやあがったな。

A　へへ、さしものお前も参ったか。

B　それでやっとおれぁ気づいたね。「こいつは飛んだ食わせものだぞ。このままソッとして置いて、空っぽの蜜柑、拾いに行こうと思っていやがる」あの場合だが、おれぁ可笑しくなっちまったね。

A　チッ、ざまあねえ……。

B　ハハハハハ……。

A　……オイ、待ちねえ。するってえと、結局おめえは指輪を一体どこへ隠したんだね。

B　ウン？

A　俺はすぐ横で見てたんだぜ。車掌の奴、おめえの口の中から耳の穴、随分際どい所まで隈なく検べやがったが、でも、とうとう見つからなかったじゃないか。

B　ハハハハハ、お前も随分お目出度え野郎だな。

A　はてね。こいつは面妖だね。こうなるてえと、俺あどうも聞かずにゃ置かれねえ……そう勿体ぶらねえでよ、後学の為に御伝授に預かり度いもんだね。

B　ハハハ……まあ、もういいよ。

A　よかあねえ、そう焦らすもんじゃねえやな。なんなら、俺にゃどうも本当のこととは受取れねえからな。

B　おいおい、嘘だと思われちゃ癪だから、じゃ話すがね。

A　おう、どういうこった……。（生唾）

B　聞いて怒っちゃいけないよ。

A　おう。

B　……あの時は身体検査だ、周りは俺が指環をもってると考えた連中ばかり、どこにも隙はありゃしねえ。

A　そうだ。

B　だが唯一、俺の手元にゃもう指環がねえと信じ込んでいる奴がいたな。

A　……。

B　そうだ……あの時から、蜜柑探しに大慌てで改札口を出るまで、お前の身体はまるで隙だらけだったぜ。しっかり腰に下げた煙草入れの底に、指環が出入りしても、気づかねえほどな。

ハハハハハ……。

〈完〉

1場

御見(おみ)それ：「御見逸れ」とも書きます。以前に会ったことのある人なのに、見かけても気づかなかったり、会っても誰だか分からなかったりすることです。

一等車(いっとうしゃ)：昭和35年まで、客車は一等・二等・三等の3等級に分けられていました。等級が高いほど内装やシートが豪華で余裕がありました。二等客車がグリーン車、三等客車が普通車に相当し、一等客車に当たるものは現在、通常の列車にありません。一等客車は主に上流階級の人が利用しました。シートはふかふかしたソファーのようなロングシートが多かったようです。

貴婦人(きふじん)：身分の高い女性のことです。

うるさ(い)：音が大きいことによく使いますが、ここでは、しつこい、細かいところまで気にする様子を表します。

2場

左様然(さようしか)らば：武士などが使った、相手の発言を受けて「左様」（そうですね）と言ったあと「然らば」（それならば）と話を切り出すような、古風な言い回しのことです。江戸時代には「世の中は　左様然らば　御尤(ごもっと)もさうで山(ござ)るか　確(しか)と存(ぞん)ぜぬ」という狂歌があり、この5つの言葉さえ知っていれば、世の中を無難に渡っていける、と謳(うた)われました。「左様然らば」は、格式張った言い方であると同時に、無難にやり過ごそうとする表現でもあります。

腐(くさ)れ：文字どおり、腐っている状態を表す言葉ですが、「腐れ坊主」のように、人や物をののしるのに使うこともあります。「腐れ蜜柑(みかん)」には両方の意味が込められているのかもしれません。

あにはからんや：意外にも、そんなことを考えもしなかったが、という意味です。

お笑(わら)い草(くさ)：「お笑い種」とも書きます。ばかばかしくて、物笑いの種にされることです。

暇(ひま)：現代では何の予定もない自由な時間を指すことが多いですが、何かをするのに必要な時間、という意味もあります。

手柄顔(てがらかお)：手柄を自慢するような顔つきです。現代風に言うと「ドヤ顔」でしょうか。

吹聴(ふいちょう)(する)：たくさんの人に言いふらすことです。

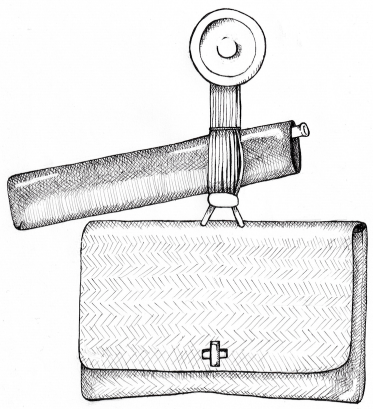
食(く)わせもん：「食わせ者」が変化した言い方です。見た目だけでは分らない、油断のならない人のことです。

おかし(い)：「おかしい」には、笑いたくなってしまうような面白さという意味と、普通ではない異常さという意味があります。この文脈では、「こんな大変な状況なのに、面白くなってしまった」という意味にも「こんな状況になり、頭が変になってしまった」という意味にも取れます。

ざまあねえ：「様は無い」が変化した言い方です。格好がつかない、みっともない、という意味です。

面妖(めんよう)：不思議であること、奇妙であることです。

煙草入(たばこい)れ：煙草を持って歩くためのポーチです。キセルを使っていた時代は、キセルに入れる刻みたばこを入れました。和服の帯の背中側に提げることが多かったようです。



▲煙草入れ

「指環」改変版解説　文責：「劇団のの」の水色担当　栗田ばね

はじめに

鹿島　初期のとんでもなく変な小説があるでしょ。「金色の死」とか。あれは小説的に驚くぐらい下手だけど、面白い。
丸谷　あの時代、文章もひどいのよね。どうしたんだろう。
鹿島　江戸川乱歩と同じぐらいひどい(笑)。　※1

ぼくは文体模写が大好きで、乱歩という人は非常に文章がまずいので、文章的には超えることができると最初に思ったんです。　※2

『指輪』はドンデン返し物で、『白昼夢』と同じ様な気持で書いたのだが、全く黙殺されてしまったので、私自身もなる程愚作だったなと悟った。　※3

だから……というわけではありませんが、このたび〈ののラジオ〉は、江戸川乱歩の「指環」を改変しました。改変する必要性を感じたのは、何度も朗読の練習をしたためです。
何度もしました。
何度もしました。
何度もしました、って何度も言いました。
みなさんも、ぜひ目で読むだけでなく、そして〈ののラジオ〉で耳から聴くだけでなく、この「指環」テキストをご自分で、目と、口をつかって朗読して、耳から聴いてみてください。おそらく、さっぱりわからないことでしょう。それは、事件に関する情報を出していく順序がむちゃくちゃだからです。こんな語り方で、「意外だ！」「事件の真相がそうだったなんて！」という気持ちになれるでしょうか？　人に読み聞かせて「わお！」と言ってもらえるでしょうか？
では逆に、どんな順序で事件を説明していけば「むむむ？」「チーズは、」ちがう「指環はどこへ消えた？」と話に引き込まれていけるのか。「そこかー！」と膝を打てるのか……実にこれは〈論理的な文章の書き方〉に関する、江戸川乱歩からの最後の挑戦状であったのです。
……あなたは、ちゃんと論理的に、話を展開できますか……？
実のところ、今回の〈改変版〉も、到底100点ではありません。現時点の限界。これ以上付き合うのはいや。ふつうの女の子にもどりま。と、マイクではなく、筆を置いた次第。
あとは、あなたたちの時代です。

※1　丸谷才一・鹿島茂・三浦雅士『文学全集を立ちあげる』文藝春秋 2006年 205, 206 ページ
※2　久世光彦インタビュー『一九三四年冬―乱歩』に関して。
http://ayamekareihikagami.hateblo.jp/entry/2014/12/03/014303　初出は「BOOK アサヒコム」
※3　乱歩による自作解説。『江戸川乱歩全集』光文社文庫 2004年

ポリシー

はじめは〈完全版〉を目指して始まった〈改変版〉プロジェクト。ポリシーを定めました。
「もしも乱歩に、数学的で論理的な脳みそがあったなら、という気持ちでやる」
言い換えると、
「内容・語彙・文体はできるだけ変えず、構成の組み替えを主に行う」
です。

実作業

作業は〈劇団のの〉主催 Noah Noel と、水色担当の栗田ばねで行なわれ、Google Document 上に「指環」全文をコピー・共有したのち、各人が編集しては相手に渡し、〈栗田→Noah→栗田〉という3ラリーで終了しました。
主に Noah が、全体を会話分として平易にするため主語・述語・目的語を補い、会話の状況・力関係を描くために相槌を補い、長すぎるセリフはひとり語りになりすぎないよう、相槌とセットで内容説明できるように変更しました。
栗田は大オチの語順を変更するなどしました。

変更箇所の解説

それでは、主な変更箇所を記していきます。
まず見取り図として、「指環」の全体構成は以下のようにチャプター分けできるでしょう。

（1）先日の事件のふりかえり～白々しい会話／消えた指環の謎
（2）素性を明かす／蜜柑を投げた謎
（3）Bの視点から事件をふりかえる～Aの意想外の行動／蜜柑を投げた謎・解決
（4）消えた指輪の謎・解決

（1）と（3）は時系列に沿って事件をふりかえっていますので、流れは把握しやすい、はずなのです。それなのに、どうしてこんなに読みづらいのか……。
ともかく、見ていきましょう。

パート(1)

A「あなたは、一袋の蜜柑を、スーツケースと一緒に下げて来られましたね」
1つ目から細かいところですが、Aが序盤で言う、ここ。
次の文は「そしてその蜜柑を」で始まるため、スーツケースの話が余計というか、単に、Bがそれなりの身なりをしている人物だという説明のための小道具に過ぎません。
よって「スーツケースと一緒に、一袋の蜜柑を下げておられました」として、蜜柑の流れが次の文につながるようにしました。
こうした微妙な語順、語尾の変更は以下、あまり採り上げません。

B「そうでしょう、私はあの日はほんとうにどうかしていましたよ」
これだけでは、Bの行動が変である、という意味になってしまいます。Bは(1)における世間話の体裁では、指環泥棒の「疑い」を掛けられただけです。
B自身がどうかしていた、という意味になってしまってはおかしいため「あの日というのは何もかも、ほんとうにどうかしていましたよ」としました。

A「あの時は飛んだご災難でした」　B「私もあの時はどうしようかと」
原文ではAとBの挨拶が済んですぐに出てくるセリフですが、少し後ろへ回しました。
この文の機能としては「以前2人が会ったとき、一大事件があった」……という、この後の展開への前フリ、思わせぶり、です。
しかし、原文では「ご災難」の話をする前に、蜜柑を勧めたくだりが挟まる。事件の核心は蜜柑にある、と思っているAの言動としては挟んでもおかしくないのですが。「ご災難」というワードが出たのに、そんな何でもない情景を喋っているのは、読者としてはストレスでした。
よって、蜜柑を勧めた → 慣れ慣れしい → あの日はどうかしていた → あの日はご災難でした、という繋がりにしています。

A「でも、あなたの態度は中々お立派でしたよ」
原文では、続けて、Bが車掌に放ったセリフをAが語ります。しかし、他人の言った言葉を、いくら印象深かったとはいえ、一字一句同じに喋るのはそれなりに恥ずかしいものです。あるいは恥ずかしげなく喋る人は、ちょっと怖い。
なので、一旦、Aが「覚えていますか？」とBに確認した上で、覚えていないなら……と喋り出すようにしました。
また、これは、事件のことを根掘り葉掘り確認してくるAを避けようとするBの構図でもあります。

A「貴婦人の旦那という男も」
「貴婦人の旦那という男」は、旦那そのものです。
Aは1回会ったぎりゆえ「～という男」扱いにしているのかもしれませんが、別に「旦那」と断定して差し支えない。事件の真相へのミスリードとして働く言い回しでもない。
「ただのまどろっこしさ」と考えて「という男」はカットしました。

B「疑いがはれても～」
「Bは濡れ衣だと証明された」と、一段落付くセリフです。ここで〈先日の事件の振り返り〉のくだりが終わります。すなわち、思わせぶりな言葉「飛んだご災難」の説明がすんだわけです。
　原文はAがすぐ「併し、不思議ですね」と事件を蒸し返すのですが、一区切りをしっかり印象付けるため「A　本当に。飛んだ厄介に巻き込まれましたね」を追加しました。

パート(2)

B「お前も中々隅へは置けないよ～」
「Bは実際に泥棒だった」と明らかになるところです。
その途端、「Bは蜜柑を窓の外に投げていた」「Aはそれに気付いたが見ぬふりをして、後で取りに出掛けた」という新しい事実が提示され、そうかと思うと、Bのセリフ終わりは「どうして、玄人だよ」とAへのおだてでおわります。
これぞ渋滞。
改変では「Bが蜜柑を投げたこと」「Aは気付いたこと」をBが言った後、Aがそれを受け「指環は蜜柑の中に隠されたと思った」ことも、ちゃんと言葉にして説明しています。

A「成程、俺は随分すばしっこく立廻った積りだ」
Bが「玄人だよ」とAをおだてるものの、Aは、拾った蜜柑に指輪が入っていなかったことで、Bへの敗北を理解しています。それでもBは「Aの方が玄人」というおだての体裁を暫く続ける……
そのことがわかりやすい口調にしました。

B「ハハハハハハ。豈に計らんや～」
このセリフ辺りから「事件は全てBの計画通りに運んだ訳ではない」、ということが明らかになっていきます。1つの区切りを印象付けるため、やりとりを加え、また全体のオチに関わる前フリとして「(先回りどころか) 改札出るお前を見送ってたぐれえだ」を入れました。

A「オヤ、これはおかしい。じゃ、何の為にあの蜜柑を窓から抛り出したんだね」
これへのBの返答は、要旨としては「蜜柑に指輪を隠して投げても意味ないだろう」ということです。
質問の答えになっていないじゃないか！
結果、次のAのセリフは「蜜柑を抛った訳が分らないじゃないか」。
乱歩を下手と呼ぶ根拠は、まさにここに極まれりで、話が進んでいないのです。
だから、質問は1つカットし、Aにはなんとなくの呼び水（「オイ、今さら嘘吐いたって～」）を喋ってもらいました。

パート(3)

B「まあ聞きねえ、こういう訳だ」
「蜜柑を投げた謎」について、Bの長広舌の始まりです。Aの「なる程」を挟んでの、このBのセリフ２つは特に、喋りの順序を変えています。
BがAに蜜柑を勧めた理由もここで出て来ますが、改変版では、ここは解釈を変えるというか、意図的な誤読を選びました。
原文での蜜柑トリックの流れは、Aの隣の席に着いたBが、「車掌たちが来るまでまだ少しの余裕がある」と判断した頃に思い付き、蜜柑をAに勧め、印象付けた後に窓の外へ放り投げた……という流れに取るのが自然です。
しかし改変では、Aの隣の席に着いたBは、慌てた頭で、ひとまずお隣さんであるBに（友好として？）蜜柑を勧める。その間に車掌たちの様子を見て、何の気なしだった蜜柑を利用する策を思い付いた……という流れにしました。Bの、焦りの中の、一瞬一瞬の頭の回転が映ればいいのですが。

B「蜜柑の中へ品物をしのばせて〜古い手だからね。誰だって感づかあね」
「玄人だよ」とおだてていたBがこんなことを言いますので、Aにはひどい侮蔑ですね。
リアクションを追加しています。

A「成程、考えやがったな〜」
このセリフで「蜜柑を投げた謎」は解説が終わります。
原文は、Bがすぐ次の話題に入りますが、ここも区切りとして「ここで番狂わせだ。なあ？」と、ことさらに新しい局面に入るというセリフを追加しています。

パート(4)

B「あの場合だが、俺あおかしくなったね」
原文の解釈に暫く時間が掛かってしまいました。
「おかしくなった」とは「可笑しくなった」なのか、「気が狂いそうになった」なのか？
Aの「フフン、ざまあねえ……」とは、騙されていた自分になのか、困らされていたBのことか……。
Bは作品全体を通して既に勝者ですので、「BがAを嘲笑している」ということにし、解釈を限定するために「さしものお前も参ったか」「空っぽの蜜柑」「可笑しくなっちまった」などが入りました。

A「おめえはあれを一体どこへ隠したんだね」
オチへの前フリとして、「俺はすぐ横で見てたんだぜ」を追加しました。

B「嘘だと思われちゃ癪だから〜」
いよいよ大オチです。
原文では、何故か最後の最後に「指環を取り戻したタイミング」が明かされて終わりますが、重要なのは「隠した場所」のはずなので、順序を変更しました。
また、そろそろオチである、という緊張感を高めるAの相槌も、多く入っています。
最後に、乱歩が考案したトリックの美しさについて。
客車の中を俯瞰で見られたらわかりやすいのですが、犯人Bは、周りを車掌・貴婦人とその仲間に囲まれて万事休すです。その中で、隣の席＝真横にいたAが、ただ１点の突破口になります。
そのAは、蜜柑作戦をスルーしてBを窮地に追い込んだ人物です。しかし、この後、蜜柑を取りに行くということで頭がいっぱいになっており、そこに勝機が生まれます。
蜜柑作戦は、形は違えど、功を奏していたのです。
囲まれた中、Aという黒駒が白に変わり、すべてのオセロがひっくり返る爽快感！ ……とは、言えませんが。

おしまい。

Podcast ののラジオ
好評配信中！

視聴・購読はこちらから
https://gekidannono.com
ご意見・ご感想はこちらへ
radio@gekidannono.com

参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

* 『Wikipedia』（https://ja.wikipedia.org/）
* 『大辞林　第三版』三省堂
* 「八方美人のススメ（イケズな話）」『古典・詩歌鑑賞（ときどき京都のことも）』（http://e2jin.cocolog-nifty.com/blog/2012/03/post-1be6.html）

劇団ののと読む名作文学　江戸川乱歩　『指環』Podcast 版

発行日　令和元年 11 月 4 日
著　者　江戸川乱歩
編　集　劇団のの
発　行　劇団のの
https://gekidannono.com/
radio@gekidannono.com

※本文の原文版は、青空文庫様掲載の原文を加工したもの、
　のの版は、原文を元に劇団ののが脚色したものです。
底　本　『江戸川乱歩全集　第 1 巻　屋根裏の散歩者』光文社文
初　版　2004（平成 16）年 7 月 20 日
初　出　1925（大正 14）年 7 月
図書カード URL
https://www.aozora.gr.jp/cards/001779/card57197.html